

アヴァダーナ文献における授記

岡 本 健 資

I. 問題の所在 本研究で考察の対象とするのは、*Divyāvadāna* (*Divy*, eds. by E. B. Cowell and R. A. Neil) と *Avadānaśataka* (*Av*, ed. by P. L. Vaidya) という、有部系に属する二つのアヴァダーナ文献である。これらにおける授記についての諸研究の内、誓願授記（誓願により得られる授記）には様々に言及されるが、業報授記（布施等の善業により得られる授記）には詳しく言及されない。しかし、これら業報授記に属する物語を注意して見ると、僅かな善業により「未来世において、辟支仏となる」等の多大な果報について授記され、それらの事柄において、授記の場面で、淨心（*prasāda*）が介在する場合がある。そこで本研究では、「淨心」という語が見られる授記の場面を取り上げ、検討する。その目的は、アヴァダーナ文献中の授記における淨心の役割を明らかにすることにある。以下に行う検討により、単に業報授記とされていた物語についても、「淨心」が多大な果報を生む際の一つの要因となっていることを見ることができる。

II. *Divy* における事例 *Divy* の中の授記物語の内、業報授記の際には、殆どが淨心に言及する。その内、代表的な事例を以下に示す。

【第 4 章】 バラモンの娘が仏陀を見て後、淨心を生じて（*prasāda utpannah*）¹⁾、仏陀へ麦団子を施す。その後、惡趣に墮すことなく、最後生において辟支仏となる、と授記される。

【第 11 章】 仏陀に命を救われた牛が、仏陀に対して心を淨らかにする（*abhiprasanno*）²⁾。その後、天界へ再生して後、轉輪王となり、出家して辟支仏となる、と授記される。

【第 15 章】 或る比丘が、仏の髮爪塔に五体投地し、如来を「世尊、如来、阿羅漢、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊である」と憶念し、心を淨らかにする（*cittam abhiprasādayati*）³⁾。その後、長い間、轉輪王位を享受することを授記される。

第 4 章では、淨心は布施の際の心の状態を示し、授記の直接的原因是は麦団子の布施という善業とも言えるが、第 11 章の様に、淨心のみで、辟支仏の授記がなされる事例もある。また、第 15 章では、授記の際に善業についての言及はない。更に、上記の事例の内、仏陀が授記する際に、「アーナンダよ、お前は、淨心を生じ

て (prasāḍajātayā), 私に麦団子の施食をした, かのバラモンの娘を見たか (第 4 章, 69.27-28).」或いは「比丘達よ, 汝等は, かの比丘が髪爪塔に五体投地し, 心を浄らかにしている (cittam abhiprasādayantam) のを見よ (第 15 章, 197.5-6).」と, 「浄心」に言及する. これらを考え合わせると, *Divy* において, 浄心は授記の原因, 少なくとも, 一要因と考えられていたと言える.

III. *Av* における事例 *Av* における授記物語は, 主に, 第 1～10 話・第 21～30 話に見られるが, *Av* における授記物語には, 田賀龍彦氏が指摘する通り⁴⁾, 定型表現が多く, 供養の内容だけを異にするものが見受けられる. 従って, その内の二例のみを挙げる.

【第 1 話】仏陀を比丘達に食事供養をし, 仏陀の神通力を見た pūṇa 長者は浄心を生じて (prasāḍajāto), 未来世における成仏の誓願をなす (2.14-18). そこで, 仏陀は微笑・放光し, 仏陀は pūṇa 長者に成仏の授記をし, 最後に, 「このことが, 私に対して心を浄らかにした (cittaprasāda) 者の, 功德ある施与である (4.4-8).」と述べる.

この同じ構造が, 第 10 話まで見られる. それらに共通するのは, 在家者が仏陀を見て, 浄心 (prasāda) を生じ⁵⁾, 供養・誓願し, 授記を受けることである.

【第 22 話】少女が仏陀の姿を見て浄心を生じ, 蓮華を散じた. ここで, 仏陀は微笑・放光し「アーナンダよ, 汝は, かの少女が浄心を生じて (prasāḍajātena), 如来に対して蓮華を散じたのを見たか (58.27-28).」と述べ, 少女に成辟支仏の授記をして後, 「このことが, 私に対して心を浄らかにした (cittaprasāda) 者の, 功德ある施与である (58.28-30).」と述べる.

第 21～30 話においても, 殆どの物語で「浄心」に言及されることから, *Av* においても, 「浄心」が, 授記の際の定型として, また授記の一要因として考えられ得る.

IV. 浄心の役割 「浄心」が, 果報との関連で果たす役割とは何か. 第一に, 既に指摘される通り⁶⁾, *Divy* と *Av* では「浄心」は悪業を消滅させる役割を持つ. *Divy* と *Av* において, 授記の定型である微笑・放光の際, 仏陀は地獄の住人に浄心を生じさせるために, 化仏を地獄に送り込む. これを見た住人は「化 [仏] に対して心を浄らかにすると (cittam abhiprasāḍya) 地獄で感受すべき [悪] 業を滅尽して, 天界や, 人間界に生まれ変わり… (Divy 68.9-11)」とあり, また, 「彼ら餓鬼達も, 世尊に対して心を浄めて (cittam abhiprasāḍya), 死ぬと, 美しき三十三天に再生した. (Av115.2-3)」という様に, 「浄心」の業滅のはたらきが説かれる. 第二に, *Divy* 第 31 章で, 「百千の金の装身具であろうと, 仏陀の諸々の caitya に対して, 心を浄らかにして (prasannacittāḥ), 右繞する賢者には及ばない. (Divy 467.5-6)」と, 浄心

を持った者の布施が、多大なる布施に勝ると説く。更に、「現存する [仏] を供養する者も、般涅槃した [仏] を供養する者も、心が浄らかであることより (cittaprasādena), [両者は] 等しく、福德に異なる性質はない。実にこの様に、諸仏は不可思議であり、〈中略〉浄心を持てる者達の果報も不可思議である (acintiyaiḥ prasannānām vipākāś ca apy acintiyah). (Divy 469.3-6)」とあり、浄心を以て為される供養の果報が不可思議であることが説かれ、浄心が果報に少なからず影響を与えるものであるとされる。

V. 授記と関係する浄心 ニカーヤには、仏陀が、既に亡くなった弟子達一人一人が死後、何処に生まれたかを授記する場面がある。そこでは、仏陀は弟子達に、或る条件を満たせば、弟子自ら預流の授記をなすことができると述べ (DN 93.11-20)、仏法僧に対する浄心 (pasāda) と戒具足との四項目を挙げる。この内「仏陀に対する浄心」の説明の際、Divy 第 15 章において、比丘がなしたことと同じ内容が記載されている。

アーナンダよ、ここにおいて、聖弟子が、ブッダに対して [以下の様に] 不壞の浄心 (aveccappasādena) を具足している。[すなわち] 「かの世尊は、阿羅漢、正等覺者、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏陀、世尊である」と。(DN 93.26-30)

以上の様に、ニカーヤにおいて、浄心は授記の条件の一つとなっているのである。

結び 以上検討した様に、僅かな善業により、多大な果報について授記される。この時、浄心 (pasāda) が、主人公の心の状態として、或いは、授記の際の原因として言及される場合がある。これまでアヴァダーナ文献における授記の原因は、主に、誓願と業との二つに分類されるのみであった。しかし、以上の様に Divy や Av における事例を見る限り、仏陀への浄心は、たとえ、それが善業の内に含められる業の一形態にすぎないとしても、授記の一因として注目されるべきである。そして、この浄心の役割として、「悪業を消滅させること」と「多大な果報を生むこと」との二点が挙げられ、更に、浄心はニカーヤにおいて、預流の授記の条件となっている。これらの点から見て、浄心というものが誓願や善業というものと関わりなく、授記と結びつく重要な要素として考えられるべきである。

1) Divy, 67.14. 2) Divy, 137.27. 3) Divy, 196.24. 4) 田賀龍彦『授記思想の源流と展開』, p. 116. 5) Av, 4.24; 9.18; 12.9; 16.6 等. 6) 平岡聡『『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に見られる業の消滅』『仏教研究』21, pp. 113-132, 特に p. 124.